



豊かさ深める文化を伝えつなぐ 万博で巻き起こった熱を花博へ

千尋
Chihiro

二〇二七年国際園芸博覧会（花博）の開幕まで一年を切った。会期は同年三月十九日〜九月二十六日で、会場は横浜市の旭区と瀬谷区にまたがる上瀬谷通信施設跡地。米軍から返還された二四二畝のうち一〇〇畝をフィールドに日本が培ってきた植物や自然との向き合い方を発信する。

日本人は豊かさを「追い求める」のではなく、「深める」ことで文化を形づくってきた。GREEN×EXPOラボの涌井史郎チエーパーソンは「このまま豊かさを追い求めていけば、いつか地球は壊れてしまう。日本人が『豊かさを深めること

を頑張ろう』と伝えることが、結果として地球の延命にもつながるのではないか」と花博開催の狙いを説く。

会場計画は既存の自然資産を生かして策定。日本の里山構造を凝縮し、相沢川周辺には水田や水辺空間を整備して自然環境の保全を図る。会場では建築家の隈研吾氏（東京

大学特別教授・名誉教授）が設計監修する「テーマ館」をはじめ、「政府出展」や「花・緑出展」があり、江戸期の園芸文化を表現する「園芸文化展示」では江戸の植木屋も再現し、日本人の自然観を紹介するそう

脈々とつながるDNA

二〇二五年日本国際博覧会（大阪・関西万博）で使ったパビリオンや建築物を再利用するのも見どころの一つ。大屋根リングの木材でタワーを造り、大阪で話題となった体験型アートの横浜で新たな姿を現す。資源を生かし続ける新しい社会モデルを実際の建築を通して示す意欲的な取り組みとなろう。

限氏の一五年間の歩みを記録したドキュメンタリー映画『粒子のダンス』が、三月下旬に東京都内で公開された。隈氏を二〇一〇年から五年にわたって密着取材し、東日本大震災の復興プロジェクトをはじめ世界一六カ国・八二プロジェクトが登場。隈建築の魅力や隈氏の英知を余計な説明を省き、映像で伝えていく。今後、全国で順次公開する予定だ。

監督は隈氏が慶應大学で教壇に立っていた時代の教え子で映画作家の岡博大氏（NPO湘南遊映坐

理事長）。当初教育関係の仕事を目指していたが、「隈先生の授業を通じて芸術、文化の魅力を知り、目が開かれた。その魅力をわかりやすく伝えたい」と新聞記者を経て、映画の世界に飛び込んだという。

教え子からの撮影要請を快諾した隈氏だったが、「音楽を大事にすること」「理屈っぽくならないこと」の二つを求めた。岡氏が推薦したギタリストで作曲家の藤本一馬氏の曲を聴いた隈氏は「ぴったりだ」と太鼓判。藤本氏は映像を見ながら、四曲を書き下ろした。

誰か一人をクローズアップするドキュメンタリーの場合、作品を提示し、対象者が語るというパターンが多い。理屈や説明が大半を占めがちだが、今回の映画で隈氏は作品について何も語っていない。事務所や現地・現場での仕事、東京大学での建築教育、ゆるやかな休日といった日常が映し出されている。

映画には建築家・内田祥哉氏（一九二五〜二〇二一年）と、建築家・

原広司氏（一九三六〜二〇二五年）が登場する。ともに隈氏が東京大学で建築を学んだ恩師。ワインを手にならなくした霧囲気での何気ない会話などを収めている。中でも内田氏が亡くなる二日前、電話での最後のやりとりが奇跡的に映像に残っていた。「先生お元氣そうで安心しました」という隈氏の表情は、恩師との別れを悟った寂しさがにじんでいた。

教育の場では限スタイルを押し付けず、学生自身が「考えては作り、造っては考える」という態度を取り、現地をよく見る（調査すること）も伝える。恩師から受けた多様な建築家を育てるDNAは脈々と受け継がれている。

博物館・美術館の経営手腕

JR両国駅近くにある「東京都江戸東京博物館（えどはく）」（東京都墨田区）が、四年におよぶ大規模改修工事を終え、三月三十一日

にリニューアルオープンした。建築家・菊竹清訓氏（一九二八〜二〇二一年）が設計を手掛けた巨大な高床式倉庫を思わせるフォルムで、一九九三年の開館以来、両国のランドマークとして親しまれてきた。

開館から約三〇年間で初の大規模改修は、老朽化への対応や機能改善にとどまらない。建築家・重松象平氏（九州大学大学院人間環境学研究院教授）がパートナーを務めるOMAの監修の下、空間演出から展示の細部、環境性能にいたるまで、一〇〇年先を見据えた「文化のプラットフォーム」として再定義されている。

五、六階の二層に広がる九、〇〇〇平方メートルの常設展示は、最新の史実と鑑賞体験の質を重視しアップデート。六階にかかる「日本橋」を挟むような形で、「江戸ゾーン」と「東京ゾーン」で構成する。江戸ゾーンでは、芝居小屋「中村座」を内部に入れる仕様へと変更。芝居小屋の賑わいをより身体的に感じることができ

る。東京ゾーンでは、明治の銀座の象徴とも言える「服部時計店」を原寸大で再現。二六メートル超大型模型が高い臨場感を演出している。新たな空間演出や大型模型の新設など館内の装いを大きく変えた。展示やコンテンツの魅力を高め、集客増につなげる狙いもあるのだから。

文化庁と文部科学省が所管する独立行政法人の国立美術館と国立文化財機構（国立博物館など）を対象に、二〇二六年度から五年間で達成すべき中期目標を策定。自己収入の数値目標を初めて示した。未達成の館は社会的な役割を十分に果たせていないとみなされ、再編の対象にするとも。SNSでは「#文化庁による博物館美術館潰しに反対します」という抗議の声が広がった。

博物館・美術館が自律的に稼ぐ組織に変わるよう求められている。文化の公共性と経済的自立をどう両立させるか。各館の経営手腕が問われている。